

## ツィツィリス「ギリシア語 — あまり 知られていないバルカン言語連合の一員」

井浦伊知郎

ブルガリア科学アカデミー (BAH) が年四回刊行する雑誌「バルカン言語学 Балканско Езикознание / Linguistique Balkanique」の第 39 卷 (1997/1998 年) 1・2 号合併号 (ブルガリアの経済事情の影響で発行がやや遅れており、実際の発行は 2001 年) に、クリストス・ツィツィリス Christos Tzitzilis (セサロニキ) による「ギリシア語 — あまり知られていないバルカン言語連合の一員 (Griechisch, ein wenig bekanntes Mitglied des Balkansprachbundes)」と題するドイツ語の論文が掲載されている。ギリシア語が「バルカン言語連合」の一員であり、既に多くの研究が公にされていることは論を待たないのだが、ツィツィリスは「言語連合再訪 (“The Balkansprachbund revisited”)」というテーマを設定し、豊富な実証的データが揃っているように見えるギリシア語の分野ではあるが、バルカン言語学という枠組み (とりわけ語彙・音声・語形成の点) で全体を見直してみることの必要性を指摘している (以下、引用する研究者名と論文発表年はこの Tzitzilis の論文の参考文献リストに拠る)。

まず論文では、ギリシア語の方言資料そのもののデータは今もなお不完全だということが示されている。特にギリシアの外のギリシア語方言でこの傾向が強いとしており、さらなる調査が必要な例として次の 4 つをあげている；

- ① アルバニアのギリシア語方言。南部ヒマラ Himara のギリシア語については、ボンガス Μπούγκας の辞書と (1966) とヴァヤカコス Βαγιακάκος の考察 (1983) 以外に見るべきものがない。
- ② ブルガリアのギリシア語。カラカチュ地方 Karakatschen のギリシア語は古典的な特徴が残っていることなどから、バルカン言語研究に占める重要度は高い。Симеонов および Асенова の先行研究あり。
- ③ トルコのギリシア語。Mackridge の指摘 (1983) によればトニヤ Tonya 及

びオピス Opis にギリシア語を話すムスリムが確認されている。

- ④旧ソ連邦のギリシア語。クリミア半島のギリシア語話者については比較的よく研究されている (Сергиевски) が、その他の地域 (グルジア) などの調査はまったく十分なものではない。この話者の一部は現在ギリシアへ移住しており、その方面からのデータ収集が期待される。

この他、旧ユーゴスラヴィア諸国やルーマニアのギリシア語話者に関するデータは皆無に近い、と論文では述べられている。マケドニア (現マケドニア共和国及びギリシア北部地域を念頭に置いていると思われる) については、若干の地域で語彙の収集が行われているものの、それはいまだ体系的なものになっているとは言い難いという。一方でトラキア・テッサリア地方については 20 世紀初頭にいくつかの研究が存在する (Ψάλτης 及び Τζάρτζανος)。

また、ギリシア語方言を他のバルカン諸言語と様々な観点から対照研究することについても、いくつかの具体的な着眼点が示されている。

例えば鼻音要素を含む音構造はギリシア語の西マケドニア方言にも見られる。そしてギリシア語世界全体にこの現象がどれくらい広がっているかということについては、カッパドキアその他の数箇所で見出されるということの他には、実はよくわかっていないらしいである。特に中世以降の語頭鼻音 (md-や nd-や ng-) 脱落について、それがどのくらいの期間に生じたかについては、説明が容易でないという (アルバニア語やルーマニア語との類似性も見ることができる)。ギリシア語北部方言と子音の対立については 4 つに大別されている ;

- ①すべての子音が硬音 (harte Konsonanten) と軟音 (weiche Konsonanten) に類別できる (ヴェルヴェンド Velvendo 方言の例)。
- ②子音グループ /k, g, γ, x, l, n, s, z, (ts, dz)/ 及び /t/ の口蓋音対立。
- ③子音グループ /k, g, γ, x, l, n, s, z, (ts, dz)/ へののみ口蓋音対立。
- ④ /k/ - /k'/, /g/ - /g'/, /ɣ/ - /ɣ'/, /x/ - /x'/, /s/ - /s'/, /z/ - /z'/, /ts/ - /tš /, /ds/ - /dž'/ の音素対立のみ。

一方で、/s/ と /z/ (及び /ts/ と /dz/) に口蓋音対立を持つものはない。これに関連して Trummer の Präjotierung における考察 (1984) や、Rosetti によるスラヴ語影響説、またトルコ語やガガウース語と関連付けた Παπαδοπούλος の研究 (1926) なども紹介されている。

ギリシア語の語形成をバルカン言語的特徴という点から考察することについ

ても、この論文の中では Sandfeld をはじめとして Асенова などいくつかの研究例が示されている。例えば数詞の形成におけるアルバニア語とルーマニア語の類似性、トルコ語語尾-ci や-lik、スラヴ語 -ica 及びギリシア語-ιάなどがこれにあたる。

ところで、バルカン諸言語においては指小辞 (Diminutiv) の形成が非常に豊富であることは疑う余地がないが、この現象をバルカン言語連合の中のギリシア語について見ると、また興味深い視点が得られるようである。例えばこうした指小辞となる接尾辞の多くが、アルバニア語やルーマニア語においてはスラヴ語起源であるということは、ほとんど議論の余地がない(アルバニアの Eqrem Çabej や Rosetti による十分な先行研究がある)。ところがこれがギリシア語となると事情が異なってくる、と Tzitzilis は指摘する。例えば Georgacas(1982) によれば接尾辞-ίτσα は、地理的にごく限られた例としての βερβέρα (<\*ვევერა 『リス』) → βερβέριτσα (<\*ვევერიца) や γούστερας (<\*гушпер 『トカゲ』) → γούστερίτσα (<\*гушперница) のようなものはあるが、その他については、地理的分布などから見てスラヴ語による影響から出てきたとは考え難い。むしろこれはギリシア語内部での派生によるものと見た方が説明が容易ではないかとの指摘もある (-ίκι[ov] > -ίτσι[ov] また-ίτ-ίτσα > ίτσα とする説も紹介されている。Συμωνίδης (1987))。

さらにこの論文では、ギリシア語の北部方言で-αβοςが非常に生産的に用いられていることについても触れている。これはスラヴ語における-ав (-av) との関係が考えられるが、北部方言に限った生産性の高さについては、ブルガリア語 какъв (kakâv) の影響も考えられることが述べられている。すなわち、次のように分類することができる (-αβοςについては-ιαβοςなどの変異も含む) ;

- ①スラヴ語形容詞からギリシア語へ入ったもの。例 ; ξίλαβος < žilav
- ②ギリシア語+αβοςによる語形成。例 ; μύξα > μύξαβος

また Tzitzilis の論文では、語形成におけるギリシア語と周辺言語の関わりだけでなく、語彙における周辺言語からの借用、あるいはギリシア語から他言語への借用についても概観している。ここではいくつかの例を示すにとどめるが、例えばアルバニアとギリシア語の関係に限って見てみると(主に前述 Çabej、及び Solta(1980)による) qull「穀物粥」<χυλός、shkop「杖」<σκάπος κλάδος、mokër「挽石」<μαχανά、bretëk「蛙」<βρότακος などがある。この他にも、論文の後半では、植物名の語形成の例をあげている。